

## 7 かすがたいしやくひんかんでいえん 春日大社貴賓館庭園 [名勝]

[所在地] 奈良市春日野町 160 番地

[所有者] 春日大社

[時代] 昭和9年（東庭）・昭和12年（北庭）（平成20・21年整備）

[概要] 奈良市春日野町に位置する春日大社貴賓館は、本殿と国宝殿の間に位置する。大正15年に社務所として建築された。コの字形に配置された主屋の東側と北側に庭が設けられ、それぞれ「東庭」、「北庭」と呼ばれている。

庭は、日本庭園史家であり作庭家でもある重森三玲しげもり みれいによって設計され、庭師の川崎順一郎かわさき じゆんいちろうが施工した。重森は国指定名勝東福寺本坊庭園とうふくじほんぼう（昭和14年作庭）など、全国で200以上の庭を作庭しているが、貴賓館庭園は、その中でも最初期の作品となっている。また、重森の著作である『作庭記』・『日本庭園史図鑑』にほんていえんしずかんには、東庭の作庭経緯や意図が、また後者には、北庭の作庭経緯や意図が記されている。このほか「春日神社社務所庭園写生図」、「春日神社社務所庭園平面図」などの図面類、作庭当時の写真や日記なども収録されており、貴賓館庭園を理解するうえで貴重な史料となっている。

東庭は、現在「三方正面七五三磐境の庭」さんぽうしょうめんしちごさんいわかと呼ばれている。前方の白砂と後方の苔庭にX字形に配置された石組によって構成されており、伝統文化を踏襲しつつ、近代的・前衛的な手法で設計するという、重森の初期から晩年かけての特徴が表れている。また、春日大社の末社名に因み、クリくりから（栗柄神社）、サカキからさかき（辛櫛神社）、スギすぎもと（杉本神社）、ツバキつばきもと（椿本神社）などを意図的に選択し、庭石にも同様の配慮が見られる。

北庭は、現在「稲妻形遣水の庭」いなずまがたやりみずと呼ばれている。春日大社の歴史に因み、平安朝の庭園を意図して、絵巻を参考にして作庭した。このように北庭は、Z字形に矩折りする遣水が特徴的である。一方、遣水の側面及び底面に施されたモルタルの護岸や青石の石橋は、近代的な造形となっている。なお、植栽は、万葉集まんようしゅうに因み、ウメ、カエデ、アセビ、キキョウ、クマザサなどが植えられている。

本庭園は、昭和を代表する作庭家・重森三玲の初期の作風が概ね本来の姿で鑑賞できるものであり、春日大社の歴史的背景と近代的な作庭手法の融合を意図した重森の想いをうかがい知ることができる点で高い価値を有する。



東庭・「三方正面七五三岩磐境の庭」(南西から)



北庭・「稲妻形遣水の庭」(南西から)